# あさ 8

2023

忍野八海

## 亀田虎童子

鬼やんま翅音をたてて引返す

倒されし腕さすりゐる草相撲

水飲んでから考へる暑さかな

落ちるだけ落ちてから掃く柿の花

芦千本葭切一羽かくまへり

（『萱』二〇〇八年九月号より）

あを

# 八月集

## 一蚕壺

佐藤　竹僊

縞馬のしっぽ縞々五月の蠅

梅雨ごもり時計がはりの窓白む

朝顔にまま喰ったかえ宇江佐真理

シャンパンが待ってゐさうで髪洗ふ

乙鳥銀座に舊き街の角

燒野原平和はじまるゴロ野球

夏の陽を逃げてころびしダンゴ蟲

手を添へて脚を動かす秋の風

練馬區にやませのやうな風が吹く

冬隣マンゴーが咲く杉並區

しばらくは海を流れて雪解川

雙蝶の落ちてゐるとは氣のつかず

たんぽぽの絮に止ってだうするの

數日で草にまぎれし文字摺草

コロナにアクリル板戰爭に核兵器

## 沖縄

須賀敏子

雲の峰今日は沖縄慰霊の日

公園のその捩花は抜かないで

めまとひを払ひて富士の御中道

老鶯の長き美声に励まされ

それぞれに不都合あれど山登り

黒南風のひと日長瀞岩畳

通院の足を伸ばせば菖蒲園

カーペット外し畳の夏来る

## 雑詠

都築繁子

薄紅の和菓子ひとりの新茶汲む
コロナ後の四人の集ひ夏料理
梅見れば梅を買ひをり余白の日
緩やかにひと日過ぎ行く濃紫陽花
茅の輪くぐり異国の人も楽しさう
ふるさとの青田を思ふ日暮時

## 梅雨

長崎桂子

線状降水帯来る心痛の月日
早朝の町の掃除や梅雨晴間
梅雨はげし唯ながめをり茶をすする
梅雨ふかし夫の好みし白檀香
明けより晴や午後の高温の夏
南天の花実りたくまし豊か
青柚子絞る残り香の指の香に
天辺の咲いて愈愈や立葵

## 薔薇祭

森　なほ子

バラ祭目指す車窓の薔薇日和
黄とピンク混ぢれる薔薇はリオ・サンバ
薔薇の名はサムシングブルー謎めいて
バラ祭やっぱりバラのアイス売り
薔薇の香のソフトクリーム持て余す
野沢菜のお焼きも売れて薔薇祭
黒姫山も戸隠山も夏霞
黒姫山は雲とたはむれ夏はじめ

## 平和

赤座　典子

「不確か」な平和沖縄慰霊の日
夕刊の二時半に来る青時雨
風鈴のぬるき日に鳴るぬるき音
夕涼の庭に園児のひしめける
山菜のたたきのとろみ梅雨に入る
オアシスに瑠璃玉あざみ永へり
羅の友母似なる丸き肩
外つ国に訪ねたき場所熱帯夜

## 白日夢

秋川　泉

卯の花をこれやこれやと舞ふ少女

眠気差すおきどころなき夏の風邪

幹白きでむしの跡白日夢

## 雨

七郎衛門吉保

雨上がり三寸伸びて青田波

雨蛙誰のタクトかコンチェルト

庭に蟇道に出るなと云ひ聞かす

子の育ち手入れ忙し親燕

朝湯してまた寝ころぶや風薫る

梅雨湿り気分転がす「のど自慢」

梅雨出水戦場のごと容赦なく

マチスの絵窓のむこうに夏の月

## ジェル

篠田純子

ビル解体燕一家は立ち退くか
ビル解体燕の巣立急がねば
「一転勝訴」燕一家の居住権
越後より皐月団子ぞ笹にほふ
空也上人のアキレス腱の清々し
ジェル涼し「吸って止めて」と検査技師

## 雨読

篠田大佳

黒南風やサイコロの旅撮影中
球場の薄暑を漏れるJポップ
高校の校舎の隅の曹達水
羽田行の機影外苑通過梅雨
外苑に下駄の音高く梅雨晴間
「人生は喧嘩」と夏の雨読の哲学書
黒南風や耳に残らぬ陰謀論
薫風やいまだ名の無きうたごころ

# 烝收集

昼酒の昼幽かりし醉芙蓉　亀田虎童子

¤

ほろほろと身のこぼれたる蜆汁　佐藤　竹僊

別辞残る初夏の廃墟のレストラン　篠田　大佳

たっぷりの鈴蘭挿して誕生日　須賀敏子

来年も此処で咲いてよ桜草

荒川線に沿ひで彩る薔薇の花　都築　繁子

原っぱの草は元気や花五色　長崎　桂子

貝桶の貝散らしあり花曇　森　なほ子

春の波幾重に寄する千里浜

子雀の着地の脚を崩しけり

蝋石の欠片どこかに春の闇　渡辺京子

登山靴ここは我が場所松落葉　赤座　典子

濠沿ひの坊ちゃん列車風薫る

薪能社の烏しづまりて　秋川　泉

小雨なか炎は高く薪能

拵をかざし見栄切る端午かな　七郎衛門吉保

用水を黒々満たし田植待ち

鳳輦の將門怖し拝みけり　篠田純子

ちんどんのクラリネットや付け祭

喜孝抄

# 六月号作品より

## 篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

もう一匹出てきはせぬか蝉の穴　　亀田虎童子

俳人は変なものに興味を示す癖がある。蝉そのものや鳴き声にももちろん目を向けるが、蝉が出てきた地面の穴に興味を示す。今日出来たばかりの蝉の穴と旬日を経た蝉の穴は確かに鮮度が違ふ。その穴の前で次の蝉が出ては来ぬかと待つ俳人。実際行動は取らないだらうが、頭の中では子供のやうにこの発想を楽しむ作者である。もちろん私もそのお仲間に入れてもらった。（喜孝）

◎

蝉が地上に出てくる場面を見たことはないが、地面にやや大き目の穴が幾つも開いているのはたまに見かけます。勿論一匹出たら終わりだが、こう言われると、まだ何か出て来るような気がしてきます。意表を突かれる句です。（なほ子）

もの思ふかたちしてをり蝉の殻　　亀田虎童子

作者は蝉の抜け殻を観察しています。おそらく、前屈みで俯いた角度での抜け殻を見て、物思いにふけているという想像を働かせます。来し方行く末を想像したり、恋の悩みを抱えていたりして、大人になっていいのだろうかと悩む蝉の姿を思い浮かべます。（大佳）



葉ざくらの中でゆったり咲いてゐる　　佐藤竹僊

桜の花が散り、葉桜になったところに小さな桜が咲いています。遅桜のようですが、葉っぱが隠しているので、遠くから見たら葉桜に見えるでしょう。秘された花という情趣もあり、葉が花を隠す奥ゆかしさもあります。（大佳）

耳もとで春風だよと風のいふ　　佐藤竹僊

春風は耳もとで鳴る。他の季節とは違う音がする。この音を句にできたらと思ったこともあった。とてもムリと忘れていたが、この句で思い出しました。「春風だよ」と言っていたのですね。（なほ子）

三原小路に昭和な麻雀荘春埃　　篠田純子

麻雀荘の中には入ったことはないですが、作者の言わんとしている光景は目に浮かんできます。表通りから隔絶されて、外装も手付かず。住宅のようなドアを入ると、煙草の煙がいっぱいの室内に、寝食を忘れてただただゲームにのめり込む面子。失われつつある昭和の一つの光景です。（大佳）

柳の芽道を訊かれて「アイドントノウ」　　篠田純子

何処で読まれた句か想像がつく句づくり。柳もしだれた枯枝にほつほつと芽が出始めたなと思

ふとあっといふ間に緑の簾が出来上がる。その柳につれて街の様子も明るさを増す。そんな街で西洋人に道を尋ねられたらだうしやう。作者はそんな折の対処方法を知ってゐる。昔日、銀座と違ひ新宿で何度か外国語で話しかけられた。きっと道を尋ねてゐるのだらう。私の逃げ道は「ノースピークイングリッシュ」。四月生れはものを尋ねられやすいのかもしれない。

秋日和道問ふ人を択びをり　竹僊

（喜孝）

## Ａーのおためごかしや花は葉に　篠田大佳

おためごかしとは、「表面は相手の為になるように見せかけて実は自分の利益を計ること」今回辞書を引いて意味がはっきりしました。一度も使ったことがない上、最近あまり見かけないこの語、実にAIにぴったりだと思います。特に最近問題になっているチャットなんとかやら?人間に尽くすはずのものが人間をダメにするかも……。（なほ子）

## 少年の冒険歩調夏隣　篠田大佳

大人に大切な子供ごころがなければ詠めない句と思ふ。少年の歩き方に「冒険歩調」を感じた。「冒険歩調」などと言う造語も面白い。何やら高調した少年の歩きぶりが伺へてたのしくなる。いよいよ夏の匂がしてきた晩春に時を据ゑた。（喜孝）



## Ａーの滝を見てをりビルの午後　都築繁子

銀座シックスのAIの滝の映像、私も見ました。数階の壁面を通して延々と落下し続ける、薄っぺらな滝は、音も飛沫もなくて滝とは違う「何か」でした。「ビルの午後」が気だるくて物憂い感じです。（なほ子）

## カラフルなふはふは遊具若葉風　都築繁子

遊具の世界も新しい素材を使って考へも及ばぬものが誕生してゐるやうだ。カラフルな「ふはふは遊具」だけではどのやうな遊具か分からないが、読者それぞれが遊具を自由に思ひ描ける。若葉風に乗ったたのしい句。（喜孝）

## 春立つや海は譜曲を奏でをり　長崎桂子

春になってくると、海との距離も近づいてきて、色々と聞こえてくるものもあって、海が曲を奏でているという景です。海の声に耳を澄ませる時の作者と海の関係性がとても好ましいです。（大佳）

◎

譜曲とは聞き慣れない言葉だ。辞書では譜曲＝譜面あったが、受け取る方はまったく同じではない。海の曲といへば、ドビュッシーの『海』とか、宮城道雄の『春の海』が私には浮かんでき

たが、句は海そのものが譜曲を奏でてゐる。しばし耳を傾け、海辺に佇む作者である。（喜孝）

永き日のマネキン回りつつ欠伸　　森なほ子

このマネキンは労働をしています。日永のうららかさに仕事の合間だというのに欠伸をしています。ただ立って回っているだけの単純労働は、人間だったら心身ともに耐えられそうにないですが、人形は春の風情を感じながら、穏やかな日常として状況処理しています。なんだか健気です。（大佳）

見下ろして屋上ばかり銀座の春　　森なほ子

巖谷小波の『富士山（ふじのやま）』の一節に〝四方の山を見下ろして〟と云ふ歌詞がある。銀座で一番高いビルのその屋上から他のビルを睥睨してゐる。ビル自体も誇らしげであるが、そこに立った作者もあたりを見下ろしてゐる心もちでゐるのであらう。「銀座の春」を「銀座春」と小気味良く書くこともできる。（喜孝）

日本語を銀座で探す啄木忌　　赤座典子

銀座の街も観光地になって、多くの観光客が東京の街を楽しんでいます。観光客向けの案内がいろいろな言語で書かれています。街で使われる現代の日本語も、なんだかへんてこです。作者は、銀座の並木通りにある啄木の碑に「日本語」を求めたのでしょうか。疎外の不安と小さな安堵を句中に読みます。（大佳）



◎

掲句の「啄木忌」は

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく　石川啄木

の一首があるからであらう。銀座を歩いてゐて外つ国人の多いのに驚かれての句。おしゃれな詠みぶりを楽しませていただいた。啄木は一九一二年四月十三日没。二十六才であった。

この句の詠まれた日は忌日に遅れること五日である。（喜孝）

花水木枝いっぱいに風を受け　　秋川　泉

「花水木」が読者に与える感情を考えて、正の感情も負の感情も吸い込んで、苦難を乗り越えるような感情を想像しました。色々な思いが乗っている風を受けて美しい花を咲かせる景から、挫折を繰り返して強くなっていくような成長を掲句に読みます。（大佳）

新緑やふはふはの服くるくると　　秋川　泉

「カラフルなふはふは遊具若葉風」と同様明るい句。「ふはふはの服」でくるくる回転する。新緑の中での解放感がくるくると体を回転させた。（喜孝）

鳶の槌春の銀座に杭を打つ　　七郎衛門吉保

銀座の街は再開発で大小さまざまな工事が行われています。作者の見た工事現場は、杭打ちに機械を使わずに手で打っている景で、光景を想像してみると、杭を打った時の残響音に杭の強固さとほのかな寂しさを感じます。（大佳）

## 屋上の植木回廊風ぐるま

七郎衛門吉保

「植木回廊」は言い得て妙。地上に生えてゐる木とは違い走り根なと見当たらない。喬い木をよくも屋上に植ゑ育ててゐるものだと感心する。「風ぐるま」は、その庭園の雰囲気をよく象徴してゐる。（喜孝）

### 忘る

憎き人忘れきれない夜の秋　森　理和
物忘れせしこと忘れ夜の秋　篠田　純子
寄席噺に笑つて忘れ夜の秋　芝宮須磨子
忘れものしたやうに吹く秋の風　鎌倉喜久恵
稿依頼忘れ自稿と初時雨　佐藤　恭子
御降りや去年のことは忘れませう　木村茂登子
呆気なく戦は忘る手毬唄　佐藤　恭子
服薬を忘れる日々や二月尽　鎌倉喜久恵
犬ふぐり野焼のことは忘れをり　早崎　泰江
薫風やどこへ行つても忘れられ　堀内　一郎
春分や野球に涙時忘る　森山のりこ
桐の花忘れられたりわすれたり　堀内　一郎
度忘れの夫婦の会話黐の花　篠田　純子
蕗を煮る忘れてをりし家の味　芝　尚子
雨あがり時を忘れて草を取る　芝　尚子
忘れたきこと多き日々雲の峰　早崎　泰江
忘れられ秋の風鈴鳴り止まず　堀内　一郎
老人の忘れるちから秋の虹　芝　尚子
思い出しまた忘れゆく冬隣　芝　尚子
忘れかけた風景に冬惜しみけり　堀内　一郎
翌日は晴木枯を忘れ去る　東　亜未
私を忘れし人や残る雪　堀内　一郎
金雀枝や夢に起こされ夢忘る　東　亜未
田螺暗く忘るることの息遣ひ　森　理和
青嵐ささいな事の忘れられず　森山のりこ
青鬼灯歳を時々忘れてる　須賀　敏子
もの忘れわすれぬ唄に赤とんぼ　堀内　一郎
あぢさゐを忘れてからの針仕事　堀内　一郎
あぢさゐや傘も忘れず荷の内に　木村茂登子
見るものはほとんど忘れ白あぢさゐ　篠田　純子
思ひ出しまた忘れたる蓮は實に　芝　尚子
忘れかけて又思ひ出す原爆忌　森山のりこ
過ぎし日は忘れて居らずシクラメン　堀内　一郎
忘れたきことの多さよお茶の花　鈴木多枝子
鍵かけて何か忘れる春の昼　鈴木多枝子
薔薇の花匂へり嫌なこと忘る　吉成美代子
何やらむ忘るるばかり小猫抱く　芝　尚子
心太わらってゆるす物忘れ　田中　藤穂
近頃は忘れ癖つき春帽子　鈴木多枝子
不機嫌を忘れてしまひ梅雨晴間　斉藤　裕子
まどろみて見し夢忘れ藤の花　渡邉　友七
夕茅花砂のつまりし忘れ貝　佐藤　喜孝
思ひごと一時忘れ毛糸編む　須賀　敏子
コーヒーは忘れずに飲む春障子　堀内　一郎
初わらひ笑った譯を忘れけり　芝　尚子

落葉踏む忘れたきこと踏みしめる　早崎　泰江
人の名を忘れてばかり寒明ける　鈴木多枝子
夕牡丹しまひ忘れし雛人形　遠藤　実
蕎麦食べて忘れてきたる夏帽子　田中　藤穂
家中に忘れものあり冬至粥　佐藤　喜孝
造幣局の桜に我を忘れけり　赤座　典子
薔薇の園とげありしこと忘れをり　早崎　泰江
西瓜食む恍惚として忘れ顔　堀内　一郎
割算かけ算忘れぬやうに鉦叩き　堀内　一郎
百合白し葬のあとさき忘れたる　竹内　弘子
茗荷汁あれやこれやと忘れゆく　芝　尚子
内服薬忘るる日あり花茗荷　長崎　桂子
帰り花いろはにほへど名の忘れ　東　亜未
吸ひ止しを置き忘れたか日向ぼこ　佐藤　恭子
地震の揺れ忘れられずに辛夷　須賀　敏子
逝きし人を忘れてしまふ寒紅梅　佐藤　恭子
大津波が忘るる六月の海青し　佐藤　恭子
茗荷のせいにしてゐる物忘れ　木村茂登子
忘れては思ひだす花雲の峰　堀内　一郎
黙祷すあの暑き日を忘れめや　木村茂登子
カナリアは歌を忘れて白いマスク　堀内　一郎
忘れ得ぬこと多かりし年の暮　早崎　泰江
飯桐の実の赤々と忘れられ　堀内　一郎

いまだまだ記念日忘れぬ雪割草　遠藤　実
雪斜め二・二六は忘れられ　堀内　一郎
梅の花記念日忘れぬ妻が居て　遠藤　実
姉妹の忘れた遊び蚊帳吊草　大日向幸江
消し忘れたるかにひとつ冬烏賊火　定梶じょう
憂きことをしばし忘るる紅葉かな　早崎　泰江
忘れぬやう小枝を折りし山眠る　大日向幸江
忘れしこと忘られぬこと冬の蜂　田中　藤穂
けやき黄葉空の青さを忘れぬし　大日向幸江
茗荷汁今さら何の物忘れ　木村茂登子
冬うらら朝の薬を飲み忘る　田中　藤穂
折紙の折り方忘れ著莪の花　篠田　純子
歩くまでの努力忘るな鯉のぼり　木村茂登子
夕虹に常の用事を忘れたり　長崎　桂子
三夜寝れば憂きこと忘れ紫蘇の花　田中　藤穂
眼薬を忘れないでと秋の旅　須賀　敏子
戦争は忘れぬうちに駒廻し　佐藤　恭子
鬼の貌忘れてをりぬ春の旅　赤座　典子
木瓜まっ赤初心な忘るべからずと　定梶じょう
人の名をするする忘れ鳳仙花　田中　藤穂
物忘れ風邪のせいにし紅を引く　田中　藤穂
置き忘れ慌てて戻る福袋　斉藤　裕子
家移りや忘れられたる菫草　秋川　泉



帰ること忘れて見入る冬怒涛　秋川　泉
初湯して詠んで忘れて一番句　七郎衛門吉保
「命どう宝」向きあふことを忘れまい　赤座　典子
忘れもの届けやうとても秋風　佐藤　喜孝
忘れものしたやうな日々夏終はる　須賀　敏子
夏過ぎぬなにか大きな忘れ物　田中　藤穂
初旅や杖忘れずに湯治宿　赤座　典子
小豆粥忘れて過ぎてしまひけり　田中　藤穂
忘れじと語り合ひたる夜半の夏　赤座　典子
死ぬことは忘れて生きる秋の風　篠田　純子
人の喪を小正月には忘れをり　秋川　泉
春闘の闘を忘れて平成尽　七郎衛門吉保
さらさらと物忘れして萩の露　田中　藤穂
忘れられぬ思ひ出の数夏来る　田中　藤穂
渦中にも酔を忘れず酔芙蓉　七郎衛門吉保
独楽回す技を忘れぬ昭和の子　七郎衛門吉保
つけ忘れ家に戻りてマスクして　佐藤　喜孝
敬ふも忘れてゐるも敬老日　亀田虎童子
忘れざる坂の名雪に転がりて　森　なほ子
キャンプの火香辛料を忘れたる　亀田虎童子
枯るること忘れていたり蘭の花　森　なほ子
曼珠沙華姉は明るく物忘れ　須賀　敏子

## 僅か

僅かなる水わけ合いて鴨の浮く　早崎　泰江
紫の色を僅かに枯れ竜胆　須賀　敏子
根を張りし僅かなすき間夏の草　長崎　桂子
父の日の僅かな望みあるやなし　堀内　一郎
夫漬けてくれし梅干あと僅か　鈴木多枝子
数へ日の僅かな青菜伊勢平野　長崎　桂子
合歓の花僅かに揺れて葉を開く　森　理和
爽やかに草のなびきは僅かなり　長崎　桂子
庭仕事僅かに過ぎて黄水仙　長崎　桂子
補に僅か初秋の声今朝の声　長崎　桂子

## 早稲

桑の実や早稲田田圃の名残とぞ　後藤　志づ
早稲の穂のきらめき奥の道誘ふ　渡邉　友七
大試験早稲田たんぼと言ふところ　堀内　一郎
初空襲早稲田でありし蓬もち　堀内　一郎
一夜明け早稲の番の沈む軒庇　渡邉　友七
早稲も刈る三味線も合奏高校生　藤野　寿子
早稲の香や野口雨情の仮の宿　竹内　弘子
早稲の香や足形遺る登呂遺跡　井上　石動
西日中早稲田通りをデモ行進　赤座　典子

## 綿

掌に受けし綿菓子ねばる酉の市　渡邉　友七
児とうたふ柿の綿帽子窓の外　江倉　京子

しもつけの綿毛に虫の軟着陸　赤座　典子
人の屋根綿雪積みて富むごとし　定梶じょう
蒲団縫ふ母に手つだひ綿ひらく　森　理和
ゆつたりと綿雲流る桐の花　早崎　泰江
吟行始綿帽子拝す三社様　赤座　典子
入海に眞綿かさなる雲の峰　長崎　桂子
タンポポの綿毛名残もみせず失せ　木村茂登子
真綿雲月の真上に大旦　佐藤　恭子
草笛や鼻にはなぢの綿を詰め　篠田　純子
雛に添ふ菊花真綿に包まれて　赤座　典子
綿あめに子供の長蛇盆踊　森　理和
洋も和も蒲公英綿毛同じかな　鈴木多枝子
綿雪やふいの別離を受入れず　須賀　敏子
銀鼠の絽をガラス越し綿豆腐　森　理和
青簾真綿のやうな月ながる　佐藤　恭子
タンポポの綿毛ふはふは病疲れ　大日向幸江
春の雨真綿のやうに糸をひき　佐藤　恭子
綿飴に顔うずめる子花菖蒲　斉藤　裕子
正月の顔に木綿の白くぐり　佐藤　喜孝
卓上で綿毛に変はる野辺の花　森　理和
綿飴のやがて真綿に夏の雲　赤座　典子
振り返し綿帽子のごと春雪　長崎　桂子
チングルマ綿毛となりて煌めける　赤座　典子

蒲の穂のモクと綿吹く日差しかな　篠田　純子

**私（わたくし）**

句碑一基私だけの朴の花　堀内　一郎
私を忘れし人や残る雪　堀内　一郎

**渡し**

渡し船一人を乗せて秋の川　内藤　悦子
鍵渡し北京へ発つ子春を待つ　斉藤　裕子
江戸川に渡し舟あり草の餅　竹内　弘子
雄物川渡しの跡に野紺菊　須賀　敏子
人の手に渡した土地に桜草　遠藤　実
寒晴や手渡しされて柩出づ　定梶じょう
羅の母と佃の渡し舟　篠田　純子
叔母白寿渡してくれし梅の花　大日向幸江
焼芋を渡してくれる大きな手　佐藤　喜孝
手渡しの錠剤零す冬の猫　秋川　泉
お礼にと渡しそびれし蜜柑かな

**私（わたし）**

栗の花私も好きよ芭蕉さん　河合　笑子
気に入りのグラスにそそぐビールと私　芝宮須磨子
秋あかねとんでとまって私の上　篠田　純子
枯園が似合ふ私の影法師　堀内　一郎
余後つづく私は白きまんじゅさげ　堀内　一郎
夜長妻哀れ私を介護する　堀内　一郎



私だけ時間のとまる初鏡　篠田　純子
春宵やフジ子ヘミングそして私　芝宮須磨子
月と芒余白の闇にゐる私　木村茂登子
春かぜとなる梢に觸れ私にふれ　佐藤　喜孝
アルバムの黴に私の匂ひして　鎌倉喜久恵
ヒットラー嫌いの私の生れし四月廿日　篠田　純子
私だけの哲学の道著莪の花　木村茂登子
私にも百歳の夢夏ゆくや　堀内　一郎
何日も過ぎて私のお正月　長崎　桂子
捩花のねぢれて咲くも私流　芝宮須磨子
私もと似顔絵を待つ日焼の子　森　理和
集合写真に載らない私秋の雲　堀内　一郎
ヴィーナスも私の耳も春の貝　大日向幸江
私から上昇気流春の雪　篠田　純子
いやおひや私の中の縄文人　篠田　純子
「明日良くなる」は私の呪文花粉飛ぶ　田中　藤穂
葉大根主役私と緑の葉　七郎衛門吉保
介護認定士ケアマネ私女正月　篠田　純子
六枚の私の部屋の畳替　須賀　敏子
起きている私一人の夜のつまる　篠田　純子
秋あかねツイッと私の目の高さ

**わたし**

六月やわたしの顔はすぐわすれ　佐藤　喜孝
わたしとは顔のない人半夏生　佐藤　喜孝
糸偏の付く名のわたし曼珠沙華　篠田　純子
去年今年ハレルヤわたしは土の器　江倉　京子
千歳飴わたしもいつかほほゑんで　佐藤　喜孝
わたしだけ取り残されし冬紅葉　田中　藤穂
花のもと猫がわたしを避けてゆく　芝　尚子
秋桜あなたわたしのけふあした　森　理和
俺俺詐偽「わたし」は聞かぬ姫早百合　森　理和
蝶はバラ科そしてわたしは裏星科　佐藤　喜孝
こゑにせずわたしも呼べり魂迎　佐藤　喜孝
きみもゐてわたしもゐます寶舟　佐藤　喜孝
庭の枇杷わたしがゐるやうに剥く　佐藤　喜孝

**渡す**

明け渡す部屋片付かず春の風　斉藤　裕子
手を出せと大きな柚子の黄を渡す　田中　藤穂

**海神（わたつみ）**

海神に重ぬ人声初鴉　佐藤　恭子

**渡る**

秋風のぼくが叩いて渡る橋　堀内　一郎
竹林に冬日が渡るささら風　関口　ゆき
雪催そそくさ渡る歩道橋　芝宮須磨子
銀の馬車渡るよと見し夕月夜　鎌倉喜久恵
手品師や水木の花に風渡る　森　理和

## あとがき

### 後の祭

今年の夏は二十四時間暑い。「あを」を作らうとするも、パソコンの置いてある部屋は扇風機で凌いでいるが、凌げるものでない。三十分も作業するとクーラのある部屋に逃げ込む。パソコンを移動すれば済むのだがパソコンには様々な器具がコードで繋がってゐて引っ越す気にはなれない。先日つひに近所の大型電気店ずらりと並んだクーラーから一台撰んで部屋につけた。おかげで仕事がはかどるのだが、バックアップを怠慢にした罪でデータベースが壊れてしまった。今年の夏はついてゐない。

### 短文のお願ひ　題「父」

**ラーメンは父の馳走や秋深まる　　堀内一郎**

ある時この句を見つけて、昔日の父のことを思ひ出した。何の用で行ったのかわからないが泉岳寺へ行った。野暮用で出歩くことができない父なので仕事がらみであらう。父は一人で外食などできない。子連れに力を得て門前の蕎麦屋に入った。わたしは人生初めて食べる蕎麦のおいしかったこと。こどもの口でもあっといふ間に蕎麦は消えた、あの蕎麦の容器は罪作りである。簀の子を子供心に知恵を働かせてめくってしまった。

掲句を読んで、一郎さんもきっとお父様の思ひ出がこの句を作られたのだらう。わたしはまだこの時の句はできてゐない。ラーメンといへば一郎さんにごちそうしていただいた「元園」の「排骨麺」は美味しかったなあ。

（喜孝）

二〇二三年八月号
発行日　八月二十g五日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番　018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）